[現代社会学部紀要　17巻１号, P71－76（2019）（一般論文）]

英語翻訳術と動機付けに関する一考察*

濵　﨑　　大**

A Study of the Relationship between the Teaching Techniques through English Translation and Motivation

Dai HAMASAKI **

キーワード：英語教授法、翻訳、コーチング、Guided Discovery

１．はじめに

本論では、翻訳を通して行う英語教授法を考察したい。我々の身近にある翻訳の世界は、さまざまなものがある。小説や映画だけではなく、観光マップや海外から輸入した商品の説明書など、ヒトや情報の移動が活発になされる現代においては、我々が注意してみないとわからない細かいところまで、すでにその世界は存在しているのである。英語教育の発展のために、こういった「身近な材料」を有効に活用する現場は様々で、それらを使って指導にあたる人間の知恵や工夫もまた多岐にわたる。そのような「身近な材料」を活用し、指導を通して見出される学生の発見が、かれらの動機付けにつながるからこそ、映画や観光マップが「教材」として有効に活用されている現実があるのではないだろうか。ここでは、アメリカで有名な歌手であるDonovan Frankenreiterの歌う歌詞を「身近な材料」、そして「教材」と考え、その歌詞を翻訳する過程から導き出される「発見」から生まれる語学を学ぶ楽しさの可能性を考えて行きたい。そこには訳出することがかなり難しい要素が含まれており、翻訳の限界を感じること、あるいは翻訳不可能論に傾くネガティブな発想を持つよりも、ポジティブで有意義な要素が含まれている。また、ここで留意しておきたい点は、翻訳で訳出された「結果」をベースに教授法を考えるのではなく、訳出する作業の過程にある「発見」や、その努力が言語を習得するポジティブな姿勢につながる可能性を考察することである。

２．翻訳と意味的等価

「翻訳」は、日本においては「教育」という観点からとても重要な役割を担ってきた。ここではまず翻訳の作業とそれが担ってきた意味に重点をおきながら、本稿であげる翻訳と英語教授法の土台を築いていきたい。

２．１　翻訳の作業と日本

翻訳を「学び」の機会につなげてきた日本では、まず西洋の思想や文明を導入することから始まった。この翻訳の作業について平子（1999, 3-7）が述べるには、翻訳の作業は二つの段階から成っており、まず原点テクストを「解釈」し、次にそれの意味等価物を翻訳テクストとして「表現」する、このように、まとめることができる。「意味的等価物」に関しては後に触れることにして、日本が鎖国を終え、西洋からさまざまな思想や文明を得ようとしたとき、そこには必ず言語というものがあった。明治期に入ると、時の先進であったヨーロッパ、特にイギリスやフランスという国の言語を「解釈」することが最優先とされ、有力者や知識人たちはこぞってそれぞれの言語を学び、先進的な思想や文明を日本の未来のためにとりいれようとしたのである。さらに西欧の思想や文明を効率よく国内に流布させるために、外国語の知識がない人間（対象）に対しても、それらが日本語で理解できるようにするために、翻訳を行う者たちは工夫を重ねた。翻訳されるものを、どのような対象が必要とするのかまでをも配慮し、伝える対象にも「解釈」できるように翻訳の作業「表現」にあたったのである。つまり、ここに「教育[1]」があったのである。しかしながら、本稿であげる「教育」との大きな違いは、思想や文明のそれ自体の「学び」と、原点テクストを解釈し翻訳テクストとして表現する過程の「学び」にある。つまり時代が進み今日の翻訳というものは、開国時の日本よりもその目的は多様化しており、またそれを必要としている場面も多様化している。目的とは他国の思想や文明を学ぶだけでなく、細かいところでは異なった言語で作られた映画や小説、漫

* Received December 19, 2018
** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部　Faculty of Contemporary Social Studies Nagasaki Wesleyan University, 1212-1 Nishieida, Isahaya, Nagasaki 850-0092, Japan

画などを「楽しむ」ため、大まかなところでは異文化を学ぶための方法のひとつとして翻訳があり、またその異文化を学びながら言語そのものも学ぶことができる有効性を利用し、語学教育の場で活用するようになったのである。

2．2　意味的等価

意味的等価とは、「解釈」から「表現」へのプロセスの中で考えなければならない重要事項のひとつである。翻訳の作業が、原点テクストを「解釈」し、次にそれの意味的等価物を翻訳テクストとして「表現」する、とは言っても、その目的や必要とする場面に合わせ、多種多様に変化をつけながら「表現」しなければならないことは避けられない。ただ単に機械的に原点テクストを翻訳テクストにできるわけではないため、この工夫を常に考えなければならないことが翻訳の作業を骨のおれるものにしている[2]。この工夫において非常に大切になってくるのが、意味的等価である。等価とはピムが解説した例をあげると、

> 英語圏の文化では13日の金曜日は縁起の悪い日であるが、その他のほとんどの文化圏ではそうではない。スペイン語圏では、縁起の悪い日は13日の火曜日である。従って、翻訳者が「13日の金曜日」を翻訳する時、必要とされる情報は何かを正確に知っておく必要がある。単なる暦の日付に言及したいだけなら、金曜日と訳して構わないだろう。しかし、縁起の悪さを話題にしているのなら、「13日の火曜日」の方がよい訳だろう。　(2010, 13-14, 武田珂代子訳)

とある。つまり翻訳者が原点テクストのもつ様々な意味（上記でいえば「日付」や「縁起の悪さ」）を解釈した後に、翻訳テクストには話題にしているどの意味（どの情報）が必要であるかを判断し、原点テクストと翻訳テクストの意味がある程度同じようになることが等価である。原点テクストの意味を翻訳テクストで等価できるものが先にあげた意味的等価物（上記でいえば意味的に「日付」の訳出であれば「13日の金曜日」、「縁起の悪い日」ならば「13日の火曜日」にあたるもの）になる。こういった意味的等価を考えるプロセスは異文化理解を深める一方で、言語習得自体の楽しさを引き出す要素でもあることは、教育の現場で映画などが教材として利用されていることを見ても明らかである。ただし、本稿では「Good Night」を「おやすみ」と翻訳する作業の中に、逐語訳的に「良い夜」と訳すのではなく、寝る前のあいさつという意味的等価を考えて訳すような翻訳術を言語教授法の一環としてここであげていくのではなく、翻訳の過程にある難しさから「発見」を導くうえで、言語教育の現場だからこそできる教授法を次に考えて行きたい。

3．発見から見出す言語習得の楽しさ

意味的等価を考え、翻訳テクストとして表現する工夫を凝らすことは簡単ではないが、異文化や言語そのものを学ぶという意味では、一般的な教科書にない楽しさがある。この翻訳の作業過程を通して行う工夫に「学び」を見出し、言語を学ぶ動機付けを行うには、指導にあたる人間が学生の「発見」を導く方法を考えることが重要である。ここでは原点テクストをよく解釈し、翻訳テクストとしてうまく表現されてきた結果を見て、その工夫を分析することを言語の教授法として捉えるのではなく、その作業過程と工夫を学生と共有し、「発見」を自発的に生み出すことができる導きができるような教授法を考えていく。

3．1　文法間違いから導き出される意味

Donovan Frankenreiterは、アメリカ合衆国出身の有名な歌手である。この歌手の歌に『It don't matter』というタイトルの歌があるのだが、その歌詞を見てみる。

Everyday people like you and me,
just wanna live naturally.
Time taught you and you taught me,
nothin gonna get us down.
Can't you see I said,

If it don't matter to you
it don't matter to me. no no no no
If it don't matter to you
it don't matter to me.

People all around
makin sounds and all kinds of noise.
If I could only get there,
then I could enjoy.
Who they try to be,
who they tryin to fool?

lets change the mood right now,
turn down the lights,
it's time to cool it down.

If it don't matter to you
it don't matter to me.
If it don't matter to you
it don't matter to me.
Yesterday and what we could be,
it don't matter.
Gettin more of what we don't need,
it don't matter.
Everything unless I'm with you,
it doesn't matter to me, no.

Bring it on down
bring it on down to me.
Sing it on down
sing it on down for me.
Sing it on down
sing it on down to me.

If it don't matter to you
it don't matter to me.
If it don't matter to you
it don't matter to me. I said,
If it don't matter to you
it don't matter to me. no no no no
If it don't matter to you
it don't matter to me.
Sometimes it don't matter to me.
Don't matter to me.
(2004, 作詞・作曲Donovan Frankenreiter)

タイトルにある『It don't matter』は、文法的に見ると間違いで、本来なら「It doesn't matter」とするべきところである。むろんネイティブスピーカーでも文法上「完璧」に話すことができる人の方が多数派ではないことは、日本語の世界でも英語の世界でも同じであろうが、有名な歌手がのっけから、しかもこの手の簡単なレベルの間違いをしてしまうことは普通に考えて考えにくい。そこでタイトルではなく歌詞をよく見てみると、やはり「It don't matter」の表現をすべて使っているように見えるのだが、たった一箇所だけ「It doesn't matter」がしっかりと表現されている。その部分は実際に歌を聴いてみると、映画でいうクライマックスにあたる部分で、一番強調されている部分であった。つまり文法間違いのあるなしの違いはあるのだが、この歌手が２つの表現を意図的に使い分けていることがよくわかる。日本の中学生レベルの英文法解説で考えると、matter（＝一般動詞）を否定形にするために、現在時制ならばdon'tかdoesn'tを一般動詞の前に置くのだが、この選択は主語が三人称・単数か否かによる。では、don'tとdoesn'tの選択を誤ってしまった場合の意味的変化は生じるのであろうか。文法上の間違いではあるが、意味の上で考えると、ただmatterの前にそれを打ち消す働きをするものがあるだけで、結果として意味の上では変化はなく、don't／doesn'tどちらでも良いといえる。いくつかの英和辞典で「It doesn't matter」の用例を検索してみると、「かまわない」「問題ではない」「関係ない」「どうでもよい」という日本語の翻訳が多かった。これらの翻訳はmatterが「重要性をもっている」という核の意味から展開されている。この歌手は、「かまわない」「問題ない」「関係ない」「どうでもよい」という意味を、あえて文法間違いを図ることによってその意味をさらに強調していたのである。例えば、子供が「It don't matter」といえば、大人は「It doesn't matter」といってその子の間違いを正すであろう。しかし意味上の問題を考えると、その間違いやそれをなおす行為すらも「重要性をもっていない」のではないか。この歌手は、そのような「意味が伝われば、文法上の間違いは重要性を持っていない」、という発想を歌詞に織り込んで、この歌詞の内容をさらに強調するために文法間違いを利用したのである。つまりこの間違いには「包含された意味」が存在しているわけである。この英語の歌詞を日本語に翻訳しているものが、実は見当たらず、ネット上で検索すると、「文法の間違いはネイティブだってする」代表的な例としてあげられているものがほとんどで、この歌詞の「包含された意味」を訳出している例は残念ながら見つけることができなかった。

３．２　「発見」を導き出す

これまで『It don't matter』の歌詞を分析してきたが、ではこのような作者の意図を解釈して、次にどのような表現に至るべきなのであろうか。つまり英語の文法間違いを利用して「包含された意味」を、意味的等価を考えながらどのような日本語で「表現」すればよいのであろうか。しかし

ながら、ここで考察している問題は、こういった問題を克服するための翻訳術を考えることではなく、学生にこの文法間違いから生み出されている「包含された意味」を「発見」させることにある。日本サッカー協会が公認コーチを養成する教本の中には、選手が自ら判断しプレーする力を高めるために、また選手をやる気にさせ、かれらの能力を引き出すために必要な働きかけの方法としてコーチング法を活用することを指導者側に教えている。この働きかけの一番重要な考え方に、「Guided Discovery（発見を導き出す）」(JFA技術委員会, 2016, 31）というものがある。この教本の中にはこう記述されている。

> 指導者は、子ども達自らが、問題解決法を発見し獲得していくことを手助けしてあげることが重要です。「やらせること」「教え込むこと」だけが、コーチングではありません。そのためにコーチは課題や場を適切に設定し、タイミングよく、ヒントになる言葉を投げかけ、発問するなどの働きかけ（コーチング）で気づきを導き促していきます。
>
> （同上，31）

この考え方はスポーツのみならず、さまざまな教育の教授法にも重要な考え方である。昨今言語教育の場においてもアクティブ・ラーニング[3]が注目され、生徒に主体的に学ぶ力を養う教授・学習法が積極的に活用されている。このアクティブ・ラーニングにおいて指導者の役割は、ファシリテート、つまり学生自身が学びを自発的に行えることを円滑にしてあげることである。そしてこの「円滑にしてあげる」上で重要になるのが、コーチング法をうまく利用し、そして学生を「発見」まで導いてあげることなのである。

３．３　ふたつの「発見」が与える動機付け

ここで取り上げている歌詞の翻訳を教材として利用しているところには、ふたつの「発見」を導くことができる。ひとつめは、「身近な材料」が「教材」になるという発見である。主体的に学生が学ぶ環境を我々指導する側がファシリテートしていく場合、ためになる「参考書」や「教科書」を紹介してあげることはもちろんだが、学生自らが自分のために、自分にあった教材を探していくことをファシリテートすることも重要である。これは多読のひとつの効果[4]としてあげられる「動機付け」をみても明らかである。自らのレベルにあった興味ある本を選択し、それを「教材」として利用する。そこに多読の強みがある。そしてその選択肢として「本」だけではなく、「身近な材料」である映画や歌などを紹介し、それらが「教材」になる「発見」を導くことが、外国語修得の「楽しさ」につながり、ひとつの動機付けにつながると考える。自らが興味を持てる材料を、「教材」にする力が、この「発見」の力ともいえよう。もうひとつは、作詞者が意図的におこした文法間違いから導き出される「包含された意味」の「発見」である。It don't matterというタイトルと、その歌詞の文脈から読み取れる「包含された意味」を発見するためには、文法の知識が必要である。ただ、このタイトルや歌詞に関しては、さほどレベルの高い文法的知識は必要としない。中学２年生の平均的なレベルにあれば、その「発見」は見出すことができるのではないか。ただ、目的をあまり明確にしないまま、学生たちに曲を聞かせ、そして歌詞を翻訳させれば、学生たちはただただひたむきにその歌詞の翻訳にあたる。実際に何度も現場で試みたが、この曲のタイトルから注目して、その文法の誤りに自発的に気がついた学生は、まず現れなかった。しかしながら、タイトルになにかおかしい部分がある、文法的におかしい部分がある、matterは一般動詞でありその意味も与える、itの人称を確認する、といった形で段階的に発問していくと、徐々にその間違いを「発見」していく学生が増えた。そしてそのタイトルと歌詞の意味を照合しながら、翻訳にあたらせてみると、多くの学生が「包含された意味」の「発見」にまで至るようになった。当然かれらの多くは、この「包含された意味」を日本語で訳出してみるところまで挑戦していた。しかしこの点においては非常に難しい作業になってしまう。ここでの目的は身近な材料を教材にする発見と、そして翻訳の過程からの発見により、学生の動機付けを考えることであるため、この歌詞の訳出に関しては稿をあらためて考察していきたい。ただし、訳出していく過程で見えていなかった「壁」が見えてきたときに、乗り越えるには困難な部分もポジティブに捉えられるような姿勢を伝えることも重要なことである。この歌詞の翻訳作業には、「どう乗り越えるのか」という側面よりも、英文法の特性を知ることで理解できる日本語との違いの「発見」のほうが大きい。そこから次につながる自発性、さらなる探究心を駆り立てること

が狙いなのである。翻訳者が行った翻訳の結果の分析もまた教授法としてはとても有効な効果をもたらすことができるし、このような過程を重視しながら行う教授法も、講義で時間をかけてできるひとつの方法だと考える。

４．おわりに

これまで、英語の歌詞をひとつの例にあげて、翻訳しながら「発見」を導くことによる動機付けについて考察してきた。そこには「身近な材料を教材として利用する発見」や、文法間違いによる「包含された意味の発見」があった。そしてその「発見」を導くために行うコーチング、あるいはファシリテートしていく教授法を論じてきたが、ここで重要なのは自発性を高めてあげることだと考える。インターネットの普及で「身近な材料」も劇的に増えており、これらの「材料」を発見し、さらにそれらを翻訳していくことで様々な発見がなされていき、語学に対する興味をいっそう深くできるはずである。しかしながら、学生に対して自発性を求めるときに、指導する立場の人間が、ただかれらの活動を観るだけに留まっていては、指導とはいえない。活動の中で生まれてくる現象をしっかりと捉え、そしてヒントを出すことや、発問すること、また学生たちが質問しやすい環境を整えることで「発見」を導き出すことができるのではないだろうか。

【注釈】

[1] ここであげる教育とは、ゆわゆる「文法訳読法」のことである。

[2] 柳父章著『翻訳後成立事情』では、その翻訳の難しさと、その難しさを克服した興味深い例が多々あげられている。

[3] 山本嵩雄著『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』の中には、アクティブ・ラーニングの様々な実践や、そのポジティブな効果も非常によく描かれている。

[4] 門田・野呂・氏木は、『英語リーディング指導ハンドブック』の中で、多読の効果として「インプット量の増加」、「読みの流暢さの向上」、そして「英語を読もうという動機付け」、これら３つのことをあげている。

【引用資料】

１次資料

作 詞・ 作 曲Donovan Frankenreite, 2004,『It don't matter』

２次資料

アンソニー・ピム, 2010,『翻訳理論の探求』武田珂代子訳, みすず書店, p.13-14

平子義雄, 1999,『翻訳の原理』, 大修館書店, p.3-7

JFA技術委員会, 2016,『サッカー指導教本2016 JFA公認C級コーチ』, 公益財団法人日本サッカー協会, p.31

【参考文献】

門田修平, 野呂忠司, 氏木道人（編著）, 2010,『英語リーディング指導ハンドブック』, 大修館書店

ジェレミー・マンディ , 2009,『翻訳学入門』鳥飼玖美子監訳, みすず書房

鳥飼玖美子, 2013,『よくわかる翻訳通訳学』, ミネルヴァ書房

山本嵩雄, 2016,『なぜ「教えない授業」が学力を伸ばすのか』, 朝日メディアインターナショナル株式会社

柳父章, 1982,『翻訳語成立事情』, 岩波書店